学校だより　１月号

令和６年１月１１日

新吉田

http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/shinyoshida

横浜市立新吉田小学校

人のあったかさ

校長　関谷　道代

「年のはじめの　ためしとて～」で始まる童謡『一月一日』に、「松竹立てて　かどごとに～」という歌詞があります。千家尊福（せんげたかとみ）作詞、上真行（うえさねみち）作曲の 1893 年から歌い継がれたこの歌により、玄関へ門松を立てて正月を迎えるという風習が全国に広まったという話を『わがまち港北　2』（平井誠二・林宏美著）で知りました。

2024年は、まさに「年のはじめの」元日に能登半島付近での地震で始まりました。建物の崩壊や火事、液状化、被災された方々の避難の状況など、今もなお痛ましいニュースが流れ、ご親戚やお知り合いなどの関係者がおられる方は胸を痛めておられることではないでしょうか。

食べ物を扱っているお店の方が、残った材料で作った炊き出しをふるまう姿がニュースで紹介されていました。通りかかった親子が声をかけられ、二人の子どもと共に「おいしいね」と食べる幸せそうな姿。湯気が立ち上る風景。白い息が寒さを物語ります。テレビ局の方が問いかけました。

「お味噌汁、あったかいですか」と。

女性は、割り箸をもった手で目頭を押さえ、こう答えました。「人の・・・・あったかさが・・・・うれしいです。」

日本海に面した実家で母と紅白歌合戦を一緒に見て、日付が変わる頃、高速道路で横浜への帰路につきました。そしてその日の夕方、大きな地震の発生。実家は、津波の心配が大きい「今すぐ避難」の地域です。ニュースで耳にした「直ちに避難してください！」の叫び声に、「もう一日滞在していれば一人きりにさせないですんだのに・・・・」と自責の念に駆られました。

しかし、あとからこんなあったかい話を聞き、少し救われたような気がしました。

隣の家の方から、窓越しに、声をかけていただいたこと。
はやく歩けない母のために、近所の方が車を出して誘ってくださったこと。
町内会の方々と一緒に大型スーパーの屋上に避難することができたこと。
そこで、あたたかい毛布やカイロが配付されたこと。
避難所では、近所の顔見知りが多く、人と話すことで不安な気持ちが紛れたこと。等々。
・・・・・・近隣の方と日頃の関係性をつくっておくことは、命を守ることになるのだ、ということを実感しました。

新吉田の地域と同じです。「しんしょう・応援隊」、保護者、近隣の幼稚園保育園の先生方、社会福祉協議会や民生委員の方々、毎朝交通安全指導をしてくださっている町内会の皆様。実にたくさんの方々の「あったかさ」に支えられ、みなさんの「あったかさ」に感謝する毎日です。

登校中に転んだ子どもに絆創膏を貼って連れてきてくださった近隣の方、困ったとき「助けて」と声をあげるとすぐに力を貸してくださる方々、本当にありがとうございます。

こうして学校が再開されること、元気なみんなと会えたことのありがたさをしみじみと感じる初日でした。

今回の地震により亡くなられた方へのご冥福をお祈りするとともに、ご遺族の皆様にお悔やみ申し上げます。被災された皆様の安全と、日常生活が一日も早く戻ることを心から願います。

今年もどうぞよろしくお願いします。